足できなくなった。私解を「夫人飛入瓊瑤臺」（方向・四）でのべているので重複を避けてここには記さぬ。

「莫種樹」を高く評価した人では日夏耿之助が先んずるけれども、かくも見事な解説は佐藤氏をもって嚆矢とする。それから三十年たって、一九六六年十月、拙稿「莫種樹」を書き『方向』十三（一九六七年三月）にのせた。

氏には李賀の詩の飜訳が数篇あり、「莫種樹」のほかに「蘇小小墓」もはいっていたようだが、この解説ほどは感服しなかった。逝去の後に出た全集にはいずれも收められている。あの全集を読み通せば他の李賀への言及を見出せるかもしれぬが、その暇がない。

みずからいうように氏は中国詩の専家ではない、しかし、というよりだからというほうがいいかもしれぬが、李賀の詩を愛し味識する点では専家に劣らぬ。もしかれがさらに賀について書いていたら、わたしなどが人の前に出る必要はまったくなかっただろう。

（佐藤春夫（一八九二―一九六四）詩人、小説家、評論家。和歌山県東牟婁郡新宮町に生まれた。……詩人としての彼は自由に雅語を駆使し、伝統的な詩風に新しい思想感情をもった大正以後の第一の古典抒情詩人である。作家としての彼はしばしば人間造型に未だしとの難をあびたが、まっこうから人生に肉薄し、人間関係の実験に力を集注する本来の小説家でなく、自身の気分と情懐のおもむくままに彷徨する、心的風景の散文詩作家であった。……）。手許の辞書をみたらこう解説してあった。

『詩人李賀』は、国学小叢書のひとつとして、中華民国二十五年（一九三六）六月、上海の商務印書館から初版が出た。一二三ページの冊子である。その著者が周氏。一九三六年はわが昭和十一年だから、佐藤春夫「漢詩漫読妄解」が出たのと同じ年である。

ハわかいとき（江蘇省）呉県で勉強していたころ、詩を読むのがとても好きで、いつも、いくつかの唐宋名家の詩集を思う存分読みたいものだと思っていた。しかし貧乏で、なかなか願いはかなえられぬ。のちに思いがけなく露店で李長吉集一部を買うことができた、さきに先輩から長吉は詩壇では独特の鬼才詩人だと聞いていた。いまその詩集を手にした。（極めて安い値で）うれしくってたまらない。自序はこのような言葉ではじまり、一九二四年「詩人李長吉の詩」なる一文を『学燈』に寄稿したこと、しかしのちに諸板本や諸家の研究評論を見るようになり、前稿が意に満たなくなって、この本を書いた、という意をのべている。

目次は、第一章、李賀の性格と詩の風格の討究（一）、第二章、李賀の平生（一三）、第三章、李賀の著作（四九）、第四章、李賀の詩（五七）、第五章、李賀詩の批判（一一〇）、第六章、李賀年譜（一一三）

その構成は王礼錫『李長吉評伝』によく似ていて、内容も共通するものが多い。はじめて読んだとき、なんだ王氏のまねじゃないか、と思ったものだ。しかし、周氏が李賀について書いたのは王氏よりも早いのだから、王氏の評伝には周氏の説が吸収されているのかもしれぬ。そうだと

すれば、王氏の本への感心の幾割かは、周氏に捧げなければならなかったわけだ。ジャーナリズムとの遠近が著作家の運不運にかなり大きく影響する。そんなことは別の観点からすればどうでもいいことだが、別の観点に立つたつもりの人がジャーナリズムの与えた価値観にふりまわされていることがよくあるもので、わたし自身ここでおのれを誡めておく。とはいっても中国の雑誌に発表された論文はほとんど入手不能で、それらを見うる日まで正確な研究史は書けない。ここでは、王氏の本について書いたことと重複するものは省略する。

1　時代の不安定、社会の紊乱、自己の不幸、が李賀の怪誕的性格を形成し、環境に同化されることを欲しないため既成の詩派から別出し、かれの歌詩の独特の風格を作りあげた。第一章

2　李賀は八一七年に死に七九一年に生れたのだ、とわたしは断定する。第二章

3　李賀が昌谷で生れたことは確実で疑いようがない。

4　高軒過詩は八〇九年に作られた。

5　かれの家庭は没落しようとする貴族の家庭で、暮し向きは盛だとはいえないが、生活にあくせくするところまではいってない。

6　李賀の生活は、一言でいえば、ゆったりと衣食の心配なく、山水に情をゆだね、その霊感を養い、詩才をのべえた、かれの生涯は短かいとはいえ、二十七年の歳月をムダにしなかったのだからかえって人にとっての幸福だった。

7　李賀の性格は一言でいえば「怪僻」だが、分けていえば、群居を好まず、吟詠をよろこび、傲慢で、感傷的で、自負が強く、敏感だった。

8　李賀の昇天説話は、かれの平生の内心の憧憬をうかがう材料。
9　李賀の詩の現存するものを二百四十二首と断定する。第三章
10　李賀の詩の特徴は四つ。凄冷詭怪、字句精錬、作曲歌唱しうる、反駢偶傾向。第四章
11　李賀詩にあらわれる思想は三つ。反社会的、消極的、刹那享楽的。
12　かれの詩的芸術は、月を写し、風景を写し、感情を写し、女性美を写し、故郷の情景を写し、想像力豊富である。
13　かれの詩の傾向は、諷刺的で、感傷的である。
14　かれの詩の長所は、用字造語がいいかげんでないから字字に力があり句句老練だ。おおむね実際生活の体験から出ている。芸術技巧上では最高の境地に到達し高妙怪麗だ。第五章
15　かれの詩の欠点。熱烈な情感、奔放の豪気に欠け、その詩を読む人に強烈な感応、多量の同情をおこさせない。その造語が冷艶詭怪、奇特百出で、人に領悟させにくいところが多い、かくて詩的普遍性を失い、少数の智識階級の人にはよろこばれるが、元稹、白居易の詩のように広大な読者群中にはいってゆくことができない。かれの詩はその理において辞におよばぬうらみがある。

〈諸家の説を綜合し、矛盾のある点を取り除き、種々の考証を試みて比較的妥当な見解に達しているV というのが斎藤晌『李賀』の評語だ。〈現在の民国インテリゲンチャは唯物論合理論の洗礼を受けているので見方にも合理を欲して一見信じ難きものは、他の諸象をもって来て無理にでも科学的説明をしようとする。その為彼等の祖先達のものの考え方、感じ方を理解することが

出来なくなっている。「詩人李賀」にもそうした点が見うけられる様である。これは目次のうらに記した一九四〇年のわたしのノートだ。中国の人々に対することばとして生意気すぎた、という感じがする。二十歳をすこし出たばかりのわたしに中国人の祖先たちの考え方や感じ方がわかってはいなかったろう。いまのわたしにも、わかっているとはいえまい。ただ、友人から「長吉狂」とあだなされたほどの周氏が、なぜおのれを狂せしむるものをもっと素直に見ようとしなかったのだろう、と思うのだ。広大な読者群中にはいろのがいいのなら元、白の作を読めばいいのだ。周氏が欠点としてあげた点こそ、周氏を〝長吉狂〟にさせた当のものであるはずだ。それがなぜかを、もっとつきつめて考えればよかったのだ。

とはいえ、一九三〇年代の人である周氏がすでに書いてしまったこの批評作品に一九七五年のわたしがこんなことをいうのも、同じように的はずれかもしれぬ。

周氏については、この本の著者であることのほか、何も知らない。どなたか、知っておられる方があれば、教えていただきたい。

橋本循

橋本循「李長吉を論ず」は『支那学』特別号（昭和十七年一九四二四月）に掲載され、のち同著『中国文学思想論考』（一九四八年、秋田屋）に収められた。わたしの読んだのは後者である。そこからすこし抄出する。

1　長吉の卒したらん年は、憲宗の元和十二年か、穆宗の長慶元年に相當するが、いづれにしても此の前後四五年間と見て大差はなからう。從つて又、彼の生存年數を二十四歳とすれば、是れ亦其生れたらん年は、德宗の貞元十年から十五年迄の間となる。

2　例へば『小傳』に『天上差樂、不苦也』と天帝の使者なる緋衣の人が語つてあるが、この短い語の中に、吉の在世の生涯がいかに苦痛に滿ちたものであつたかゞ表はされてある。

3　更に元稹の訪問に對し面會を謝絶したといふ一事によりて、其鼓忽と拗腸とを尤も善く看取し得るのである。……かうした性格が彼の先天性であつたことは彼の作品の隨處にも露はれてゐる。……長吉は科目の如何を論ぜず、その及第者に對して一種の嫉み心ともいふべきものを持つてゐたであらう。これは彼の性格から左樣に考へられる。又一つには元稹や白居易の作詩の態度乃至は傾向ともいふべきものに嫌らめものがあつたかも知れぬ。

4　長吉は、かくて長安から西の方昌谷へ歸つたのであるが、『少健無所就。入門媿家老』と云へるを見れば都に於ける不快なる記憶は惡靈の如く念頭に浮ぶこともあつたらしい。

5　彼には彼自らの表現法があつた。それは『昌谷詩』のみに限らず、他の篇に於ても然りである。明の王世貞が、〈李長吉師心。故爾作怪。亦有出人意表者。詩鬼〉と云つたが蓋し此意味であらう。人は曰ふ、長吉は陳言を去ることを務めたと。陳言を以てしては彼の眼裏に映じた自然や人生を咏ずることは出來なかつたのである。陳言を去ることに務めたのではないが、陳言はおのづから彼より去つたとも云へる。われらは先づ僻性高才、拗腸盱眼の人――即ち長吉を腦底に描き、然る後其詩を讀むべきである。極思苦吟、彼の母夫人の所謂其心を嘔き出したのである。

従って片言隻語と雖も新にして奇であり、古人の未だ道はざる所を道破したのである。古來彼の詩が詰屈幽奥といはれ、晦澁僻隠であるといはれ、理に近からずと批評せられるのも、かうした處に其因がある。例へば『昌谷詩』に就て見るも、『草髮垂恨鬢』『太沙好平白』『立馬印青苔』『愁月薇帳紅』『置雲香蔓刺』の句の如きは晦澁僻隠と云はざるを得まい。然しながら宋の劉辰翁の云へるが如く落筆細讀すれば方に作者の用心を知ることができる。而して其超然たる手神、緻密なる結撰に驚嘆を發するのである。

6『昌谷詩』に神女の廟のことを敍した一段があり、それは一種凄寒を思はしむる文字であるが長吉には之に類する神秘的な詩篇が少くない。『公無出門』『神絃曲』『神絃』『神絃別曲』『貝宮夫人』『蘭香神女廟』など皆此類である。……皆、現世のあらざる所を寫したもので、彼の想像力と幻想力の逞しさを想はしめる。……其作風を見るに『公無出門』は楚辭の招魂に、『神絃曲』は九歌の山鬼に、『蘭香神女廟』は離騷の或る部分かた歌の湘君か湘夫人に、『神絃』は山鬼に、『神絃別曲』は湘君に似てゐる。これ杜牧之が李賀の詩に序し騷の苗裔と云へる所以である。たゞ措辭に於て楚騷を學んではゐるが、楚辭に見るが如き諷刺の意には乏しい。

7　要するに李長吉は天縱の奇才を以て世の容るゝ所とならず、昌谷山中、拗腸盱眼の一生は二十四年を以て終つたが、其作れる歌詩は哀怨荒怪、幽深詭譎を以て特色となし誠に中國文學史上の一大偉觀である。之を客觀的に見れば當時七言近體の詩既に爛熟の頂點に達し又變化せんとして變ずる能はず、彼れ此時に世に出で、奇思卓犖、苦心孤詣、淺卒靡薾の辭を成すを好まず、恒の近き所を成し、彼みづからの歌詩を成就したのである。明の李東陽、長吉の詩を評して曰く、

〈顧過於劍銘。無天眞自然之趣。通篇讀之。有山節藻稅。而無梁棟。知其非大道也 讖讖〉といへるも以て通論と做すことは出來ぬ。むしろ嚴羽の〈長吉之魂說、天地間自欠此體不得讖讖說〉といへるの妥當なるには及ばない。

生卒年の考証などに問題があり、その他にもわたしとしては受け容れにくいところもないではない。しかし、李商隱の「小伝」や、「宣室志」の李賀にまつわる説話を詩人論として見ようとする視点は注目に値する。

6の楚辭との比較論などは、それだけで一論文をなすに足る好題目で、楚辭にくわしいこの人こそそれをすべきだと思うのに、ここではすこぶる簡單で、惜しい。

極めてアカデミックな体裁の論文で、少年のころのわたしには物足りない気がしたのだが、結論にあたるワをいま讀みかえしてみて、李賀に対し篤実な同情をもつ人だと感じる。

橋本循　明治二十三年（一八九〇）六月二日生。京都帝国大学文学科支那文学專攻。臨済宗大学教授・京都大学講師等を経て立命館大学教授、文学博士。『訳註楚辭』『王漁洋』など。立命館はすでに退職と聞いた。

付　記

稲田尹「李長吉の生涯」（一九四〇年）が橋本論文に先んじるが、本誌第五号にとりあげた。日夏耿之介は『美の司祭』を読み得たときとりあげたい。陳培瑋「李賀評伝」（一九二五年）は森紳一氏からコピーを贈られたが　氏の手で紹介されるのを待ち、ここでは割愛する。

江綺娜「別界からの眼」

ベゴニアがあんまり窮屈そうな顔をしていたものですから、菖蒲の節句の日の朝七時頃から散歩して、早速株分けを致しました。ぐずぐずといつまでも土をいじっておりました所、十時になりまして、郵便配達が参り、封筒の色合いで、すぐ、「李賀研究」だと、解りました。

遊ぶということが解せない人間にとっては、それなりの玩具が必要なのであり、それが、どこかから、郵便で送られて来たということは、この上なくうれしいことであります。

畑野恵子女士の文章を読みました時、ほんに、自分の大学生の頃の感激を思い出しました。

李賀、私にとっては、私を知っているのだが振り向きはしない、影、と言った様なものです。私は私を捜すために、私を知っていそうな人の書いた物を捜します。私は、私が何がわからないのかさえわからないのです。

……

私は祖父と二人暮しで、めったに路上で祖父と出逢いませんのに、先達、自転車を押している祖父を、ふと見てしまいました。明るい日ざしの中で、見てはならぬものを見た思いで、私は、ひどく困って、ちょっと泣き顔になりかけました。明るい日ざしの下の風景を、私は、トタン板の穴から見た。それは、手の届かない世界に見えてしまったのです。

家にもどって考えました。李賀の詩のあるものは、不思議と、この別界からの眼が見た、丸わ

くの中のひどく淋しい風景を思わせる所がありはしませんか。
さて、実際に見られている滅びゆくものは、一体、何を考えているのでしょう。次は私の番なのに、何を考えたらいいのでしょう、と思うのです。
うっかりしますと、私の書いていることは、ひどくごちゃごちゃに、なりがちです。
あんなこともこんなことも、草森氏を見ながら、李賀を考えるという変な癖がついてしまって、こんど又そこに原田先生がはいって来て、いよいよ「李賀の群れ」を考えておりますのです。日本にある「李賀の群れ」。そうしますと、中国に「李賀の群れ」はあるのか、と考えます。

つるバラが、とてもたくさん、山盛りに咲いております。藤は散りました。時折、私は李賀の御母さんが見たいなあ、と、とんでもないことを考えます。
どんな学問の噛りさしも、ころがっています。そしてたくさんの「ハッタリ」とともに私は生きていますが、ごちゃごちゃにしたものが、何かゝ方向△を持っている様な気がしてなりません。それがたったひとつの玩具なのですもの。
……

編者付記

これは、一九七五年五月六日に受取った、江さんからの「五月五日端午」の手紙である。手紙の全体に李賀の詩のもつ「淋しさ」が反映し、その「淋しさ」を生み出す契機が正確に照射され

ていると感じたので、了解を得て紹介することにした。……は省略した部分を示し、題名は文中の語をとって編者が仮りに付けたものである。

前後してもらった別の人の手紙に、李賀の母はどんな人だったのだろうか、といった問いがあり、偶合にしても、ふしぎであった。

「李賀の群れ」ということばは、不意を衝いた。聞かされてみると、李賀にかかわりをもった人、もう人、もとうとする人が、ずいぶん多くなった。それらの人は、李賀という小路で袖の触れあうことはあっても、そこで徒党を組もうとせぬ点で、群れとしかいいようがなく、李賀の詩とむきあったところに、影のような洞窟を掘っている。おのおのの洞窟がどこかでつながる保証はなく、深い穴が浅い穴より李賀の影を精密に映すとも限らない。

しかし掘り始めた穴は、それを捨てて立ち去るのでないかぎり、掘りつづけるほかはなく、力尽きたとき、そこに、李賀ではなく、おのれの屍を埋めるのかもしれぬ。それもまた、一つの安息、というべきであろうか。

1975.5.29.

《雑記・81》　書誌三条

1975.5.31.

羅振常遺著・周子美編訂『善本書所見録』（一九五八年・商務印書館）巻四集部につぎの記事がみえる。

昌谷詩注四巻　唐李賀撰，桐城姚文燮經三評註，前有自序。錢澄之、宋琬、黄伝祖、陳焯、何永紹、方拱乾諸序，姚伯昂藏書。有昂朱筆批，及姚氏收藏（白方方印）、小紅鵝館（朱方）、元

之之印、半白半朱方印、竹葉亭長（朱方）、黄柏山樵七世孫（朱方）、桐城姚伯昂氏藏書記（朱長方）諸印。

李長吉詩集四卷外集一卷　元本、小黒口、九行十八字。黄蕘圃以宋本校、有題款數處。曰「馮氏影宋本校金本、復校宋本」、二十行、行二十八字（宋本題李賀歌詩篇）後題詩一首。

李長吉歌詩四卷外集一卷　明末刊、西泉吳正子箋注、須溪劉辰翁評點。

〈雜記・82〉　書誌二条

一九七二年十一月十七日のノートにつぎの二条を記す。一は、

一、李長吉詩集　李賀　宝晉書籍目録、充氏祐祥編『書目集覧』（一九三一年）所收。

これは拙稿「和刻李長吉詩集」（李賀研究、第四号）にとりあげたもの。二は、

李長吉歌詩四卷　三冊

唐の李賀撰ず、賀が事蹟は新唐書文學傳に具さなり、賀系は鄭王に出づ、故に郡望を以て隴西を稱せり、實は昌谷に家するなり、この書は西泉の吳正子箋註、須溪の劉辰翁評點ありて明このかた徐渭等の五家の註本あり、又邱象升等の六家の辨註、孫枝蔚等の七家の評あり、王琦また諸家の説をとり、彙解を作れり、遞にあひ糾正し、互に發明あり、然ども要するに正子の註を以て最古とせり、賀が詩を為るや冥心に孤り詣り、往々筆墨の外に出で、意を以て言ふべからずと云へり、

『解題叢書』（一九一六年）に收める梯山精一堯陳譯「官版書籍解題略」の記事で、凡例には〈天保十五年甲辰春月江都梯山精一堯陳甫識〉としるす、その年は一八四四年。この本の版木は

のち京都大学の有に帰し、戦後にいちど刷って頒布した。その本には吉川幸次郎博士の漢文の解題がついていたが、その解題は官板と増刷についてくわしく李賀に関してはほとんど筆を費していなかったように記憶する。この本を購うほどの人は、解説を必要とすまい、との用意に出るものか、と推察するが、天保の解題をわたしは愛する。

1975.6.1

《雑記・83》　書目一束

北京人文科学研究所蔵書目録

陶淵明全集四巻李長吉詩集四巻　晋陶潛撰　李長吉詩集唐李賀撰　明王氏刊本　一　六

李長吉詩集五巻　唐李賀撰　明万暦四十一年刊本　一　二

昌谷集四巻　唐李賀撰　明刊本　一　二

国立中央図書館善本書目 増訂本　一九六七年　台北　国立中央図書館

李賀歌詩編四巻集外詩一巻二冊　唐李賀撰　北京刊　公牘紙印本　明文柟及近人袁克文手書題記

錦囊集四巻外集一巻二冊　唐李賀撰　影鈔元至元丁丑（十四年）復古堂刊本

李長吉詩集四巻一冊　唐李賀撰　民国常熟周氏鴿峯草堂影写　明弘治本

唐李長吉歌詩四巻八冊　唐李賀撰　宋吳正子箋注　劉辰翁評点　元刊　翻珍本

李長吉歌詩四巻外集一巻二冊　唐李賀撰　宋吳正子箋注　劉辰翁評点　明末葉刊本

李長吉歌集四巻外集一巻四冊　唐李賀撰　宋吳正子箋注　劉辰翁評点　明末葉刊本　朱批

李長吉歌詩四巻外集一巻二冊　唐李賀撰　宋劉辰翁評　明吳興凌蒙初刊　朱墨套印本

唐李長吉詩集五巻四冊　唐李賀撰　明徐渭輩懋策批注　明万暦癸丑（四十一年）刊本　近人鄧邦述

批校并題跋

唐百家詩一百七十卷附唐詩品一卷三十二册　明謝重編　明嘉靖刊本　李長吉集四卷　唐李賀

北京図書館善本書目　一九五九年九月中華書局

卷六　二十六

李長吉文集四卷　唐李賀撰　宋刻本一册

歌詩編四卷集外詩一卷　唐李賀撰　清初錢氏述古堂影宋鈔本一册

歌詩編四卷　唐李賀撰　蒙古憲宗六年趙衍刻本　黄丕烈跋　陸損之題款　二册

歌詩編四卷集外詩一卷　唐李賀撰　明末毛氏汲古閣刻唐人四集本　毛宸校　沈寶謙跋　二册

歌詩編四卷集外詩一卷　唐李賀撰　明末毛氏汲古閣唐人四集本　傅增湘校　吳慈培校並跋　吳昌綬跋　一册　傅損

唐李長吉詩集四卷　唐李賀撰　明弘治十五年劉廷瓚刻本四册　蔡損

李長吉歌詩四卷外詩集一卷　唐李賀撰　宋劉辰翁評　明凌蒙初刻套印本　李堯臣跋　四册　蔡損

李長吉詩集四卷外詩集一卷　唐李賀撰　明刻本　黄丕烈校跋並題詩　三册

李長吉集四卷外卷一卷　唐李賀撰　明黄淳耀評点　清雍正九年金惟駿漁書樓刻本　吳梅摘録何焯二樵山人諸家批注　一册　吳損

錦囊集四卷外集一卷　唐李賀撰　明弘治十三年馬炳然刻本　二册

李長吉昌谷集句解定本四卷　唐李賀撰　清姚佺箋陳惇丘象隨辯註　清初梅邨書院刻本　吳昌綬校並跋　二册

卷八　九

唐四家詩四卷　明抄本二冊　唐李賀詩集一卷　唐李賀撰　唐朱慶餘詩集　唐朱慶餘撰　唐皎然詩集一卷　唐釈皎然撰　唐靈一詩集一卷　唐釈靈一撰

稽瑞楼書目　陳揆編

李賀歌詩編四卷　影宋鈔一冊

李長吉詩箋注五卷　旧鈔一冊

崇文總目　叢書集成

李賀の集を著録せず。

国史経籍志　焦竑輯　叢書集成

李賀詩　五卷

文淵閣書目　楊士奇等編　叢書集成

李長吉詩　一部一冊闕

遂初堂書目　尤袤撰　叢書集成

李長吉集

聚竹堂書目　葉盛編　叢書集成

李昌谷詩　一冊

世善堂蔵書目録　陳第編　叢書集成

李長吉詩集五卷